

## 英語による授業「Media and Japan」における課題と考察

栗田 聡子

### Practice of “Media and Japan” in English — Its Benefits and Challenges

KURITA Satoko

〈Abstract〉

Since the fiscal year of 2015, The Center for International Education & Research of Mie University has offered a new course “Media and Japan” that is taught in English for both international students and Japanese undergraduate/graduate students. The purposes of the course include, to increase understanding of the Japanese culture through media, and to enhance international communication and English competency through discussions and group presentations. This report discusses how media related topics and group presentations could be effective to enhance understanding of not only Japanese culture but also media literacy and cross-cultural communication for both international and Japanese students, by introducing the syllabus and contents.

キーワード：メディア、日本文化、異文化コミュニケーション、英語

#### 1. はじめに

2008年、文部科学省は「留学生30万人計画」の名のもと2020年までに30万人の留学生の受入れを目指す計画を策定、その実現に向けて国内の留学生の数は上昇している。三重大学はグローバル30の選定大学ではないが、2013年には295人であった留学生総数が今年度は314人と増加傾向にある。欧米の大学を選択する傾向にある優秀な留学生を多く受け入れるためにも、留学生のための授業を充実させて大学の魅力を高めることは「留学生受入体制の整備を中心とした大学の国際化」（文科省、2008）にも繋がる重要な課題である。この意味で、日本人学生とともに学ぶ機会を留学生に与える環境を整えることは重要な課題である。だが、日本語レベルが初級の留学生にとっては、日本人学生と共に学ぶ機会は英語で実施される授業に限られており、履修できる授業が少ないのが現状である。

本学の国際交流センターでは、「国際キャリアアップコース」と称して英語による授業を留学生と学部生を対象に開講している。教養教育機構への開放授業として開講しているため学部生にとっては教養教育の単位を取得できる授業である。現在「国際キャリアアップコース」では、以下の5つの授業を開講している。“The society and culture of Mie”（三重の社会と

文化)、“Our world heritage”(世界遺産と私たち)、“Environmental issues”(環境と地球)、“Short essay”(英語でエッセイ)、そして“Media and Japan”(メディアと日本)である。これらの授業の中でも、特に“The society and culture of Mie”と“Media and Japan”は、留学生が日本人学生との交流やコミュニケーションを通じて日本人の思考傾向や日本文化・社会について考え理解することができる利点があり、日本文化に惹かれて留学を決意した多くの留学生らの学習意欲も刺激することができる授業であると言える。

日本人学生にとっても、留学生と学ぶ環境の中で異文化に対する理解が深まり、グローバルな視点と視野を持つ機会を提供する。英語能力の向上もグローバル人材として成長するために必要不可欠であり、これの利点は大学のグローバル戦略における国際教育という理念にも通じる。

本稿では、2015 年度に着任した教員(著者)が開講した“Media and Japan”に焦点をあて、試行錯誤のもとに実施した授業の概要と結果を紹介しながら授業の利点や課題について検討していく。

## 2. 国際教育における「メディア」の有効性

昨年、著者は日本語上級者の留学生と学部生を対象にした日本語による授業「メディアと日本」において、「メディア」というテーマで彼らが共に学ぶことの意義を 1. メディアが持つ影響力の大きさ、2. メディアが国の文化や国民性を即座に、感覚的にとらえることができる素材であること(異文化理解)、3. 自国の文化や社会について客観的な分析や理解を促すことを可能とする素材であること(自国に対する客観視)、4. メディアの物語や登場人物、またはメディアに関係する社会現象や問題点について話し合うことで、異文化理解を深めると同時に、異文化を超えた人間同士の交流を可能にすること、などを挙げている(栗田, 2015)。ドラマ等の登場人物の行動や心情について共に考えるだけでなく、メディア技術の発展(ソーシャル・メディアや VR)が社会や個人に与える影響について議論することも可能である。

このように、「メディア」というテーマは政治経済、戦争・紛争からビジネス・娯楽、コミュニケーションにまでおよび、その即時性はタイムリーな話題を学生に提供でき、討論できる機会である。その反面、地理的(日本国内、世界)にも時間的(過去・現在・未来)な面でも広範囲の話題を含むことは利点であると共に課題も多い。日本語による授業と同じく、授業の焦点を見極めずに進めることにより方向性を失う危うさがあった。この点を考慮しながら、2015 年から実験的に使用してきたシラバスを紹介する。

### 3. 「Media and Japan」の授業シラバスについて

#### 3.1. 授業の概要と目的

授業概要は、“This course will offer both International students and Japanese students an opportunity to discuss Japanese society and culture. Media content and process of communication are a primary source for us to understand culture and society of a given country. In this course, students will get an insight into Japanese culture and society, as well as their psychological tendencies, through various forms of media, such as newspapers, television, film and the Internet.”とし、授業目的については、英語能力の向上も含めて 1)Increase understanding of the Japanese culture, society, and psychological tendencies through media, 2)consider characteristics of Japanese culture and social issues (by comparing with these of student’s own country), 3)enhance international communication through discussions, and 4)increase English competency, の4つを挙げた。

#### 3.2. 授業の内容について

毎期一回目の授業でアンケートをとり、このクラスで学びたいこと、今一番興味があることなどについて質問したのだが、学部生、留学生の興味は様々であったため、実験的に15回分

表 1. 2016 年度後期「メディアと日本」シラバスの内容

回数	授業の内容
第1回	Introduction / Syllabus (for Japanese students)
第2回	Introduction (for foreign students) Introducing yourself /About presentation/ Making groups
第3回	Ads as cultural reference ①
第4回	Ads as cultural reference ②
第5回	Film as Japanese culture / About a film we watch
第6回	Film watching / The first half
第7回	Film watching / The second half/ Discussion
第8回	Television dramas and Japanese society
第9回	Media and politics
第10回	Japanese pop culture as soft power
第11回	Group presentation preparation
第12～14回	Group presentation
第15回	Wrap up / Class evaluations

の授業を以下のような構成にした。2015 年度、2016 年度の前期・後期で類似したテーマを扱ったが内容はその時期に話題であった出来事や情報を選んだことでかなり異なるものとなった。留学生は授業が開始されてから日本語レベルチェックを受けるため、多くの留学生が授業 2、3 週目からしか参加できないことから、1 週目は学部生（日本人が大半）対象に、2 週目は留学生対象にシラバスの確認や自己紹介を繰り返すこととなった。

### 3.2.1. Ads as cultural reference — 広告から文化を考える

広告は、ターゲットである消費者が生活する社会や文化・心理傾向をリサーチした上で制作されるメディアであるため、日本を理解するための最適な材料の一つと言える。“Ads as cultural reference”として、日本だけでなく留学生の出身国の広告の特徴を同ブランド（例：ハーゲンダッツやトヨタの海外展開）や同じ商品カテゴリー内で比較するなどして日本が自国の文化とどのように異なるかについて考える場とした。課題①として、「日本らしいと感じる広告」「自国の文化を反映していると感じる広告」を探して規定の A4 用紙に貼り付け、その広告の内容と選択した理由についてグループ内で説明する内容を課した。この課題により、留学生と日本人学部生を感じる「日本らしさ」を比較して日本文化や日本人について考察できるだけでなく、学期始めでまだ打ち解けていない学生らが自国の広告と文化についてメンバーに紹介することで、アイス・ブレイクの機会となった。

### 3.2.2. Watching films — 映画に描かれる日本

日本社会や文化、日本人の思考・心理傾向などについて共に考える素材を提供するため、各学期で映画鑑賞の時間を設けた。優れた評価を受けた作品でも英語字幕なしでは留学生が理解できないため、映画の選択は予想以上に困難であった。留学生の多くは日本のポップカルチャーに憧れて渡日しているのであるが、アニメ以外の映画からより現実に近い社会や日本独自の芸術表現などに触れることができる作品を探すことにした。映画の選択は試行錯誤で行った結果、以下のとおり各学期で異なる映画を提供することとなった。

#### ■ 2015 年前期 — 『Shall we ダンス?』(1996)

2015 年前期は、1996 年公開の『Shall we ダンス?』(監督：周防正行)を授業で鑑賞し、各自インターネットで公開されている 2004 年公開のリメイク版アメリカ映画 “Shall we dance?” (監督：ピーター・チェルソム)を観て日本社会や日本人の心理傾向をリメイク版と比較して考察する課題を課した。この映画は、幸せだがごく平凡な生活を送る会社員、杉山正平(役所広司)を主役に社交ダンス教室を舞台とした感動と笑いの秀作であり

19 ヶ国で公開され高い評価を得ているのだが、この映画を過去に鑑賞した学生は日本人学生も含めて皆無であった。

オリジナルの日本版は、概ね学生らに好評であり、日本の会社社会・家族形態・日本人の感情の表現方法やコミュニケーションにおける特徴、など映画を通して気づいた点が感想エッセイ（課題）で多く指摘されていた。欧米の留学生にとっては、日本版で描かれているような夫婦関係、特に主人公が妻に隠し事をする点などに対して違和感を持ったようである。このように、『Shall we ダンス?』は異文化としての日本文化を分析するためには優れた素材であったのだが、学生らが普段から見慣れているアニメやアメリカ映画と比べて長い日本独特の「間」（会話間の沈黙）や遅い場面展開、少ない感情的な起伏という映画の特色は、留学生の大半を占めていた欧米からの留学生らの集中力を阻んでいたことは否めなかった。

#### ■ 2015 年後期 — 『Sayuri』 (Memoirs of a Geisha) (2005)

2015 年後期は、2 名の学部生以外はすべて留学生であった。『Shall we ダンス?』で眠気を誘う結果になったこともあり、留学生らの希望どおり鑑賞する映画を彼らが決める、という方法をとった。女子留学生が多かったこともあり、第二次世界大戦前後の京都花街を舞台にイメージにした『SAYURI』 (Memoirs of a Geisha) (2005 年：ロブ・マーシャル監督) が選ばれた。アメリカ映画なのだが、希望した留学生が圧倒的に多かったこと、日本を舞台にしていることで承諾した。映画はベスト・セラーになったアーサー・ゴールデンによる原作『Memoirs of a Geisha』 (1997) を元としている。貧しい漁村で育った 9 歳の少女、千代が祇園を模した架空の町の置屋に売られ、厳しい生活の中で人気芸者に成長していくサクセス・ストーリーである。アメリカでの評判は上々で、第 78 回アカデミー賞で 6 部門ノミネートされ、3 部門で受賞している。その反面、作品は「外国人が持つ日本のイメージ」をもとに描かれたフィクションであり、主役の千代を演じた中国の大物女優チャン・ツイイーをはじめ、大半の舞子や芸者は中国や東南アジア諸国の女優陣で固められている。言語は英語であるが、不自然に外国語訛りの日本語（「お母さん」など）がところどころ使用されている。花柳界本来の美意識やしきたりも全く反映されておらず、芸者や舞子の着物の質や着付け方法も実際と異なっている。映画内のセットも祇園の街並みや設えとはかけ離れ、シノワズリー（18 世紀ごろヨーロッパで流行した中国趣味の美術様式）的なものも含まれていた。著者は学生とともに初めて鑑賞することとなったのだが、承諾する前に観ておくべきであったと反省する結果となった。

英語の鑑賞後に行ったディスカッションで、映画の中に描かれている日本について違和

感を持った留学生は驚いたことに数名だけであった。タイやインドネシアのアジア出身の留学生からも日本文化についての理解が浅く、オペラ『蝶々夫人』にも描かれているような「外国人が持つ日本(人)のイメージ」は欧米だけにとどまらないことが判明した。そこで、次週の授業では、映画シーンの中の建築や設えや衣装、人間関係のあり方などが実際の日本のものとは異なる点を画像や動画を用いて指摘し、オリエンタリズム (Orientalism: Said, 1978) の概念を紹介した。Orientalism は欧米人がアジアや中東、北アフリカに対して抱くエキゾチックなイメージで、文明的な優越感からくる思考傾向とも考えられている。感想文は、映画が表面的な娯楽作品だったことにより、内容を掘り下げて書くことは困難だったことが感じ取れるものが多かった。

#### ■ 2016 年前期 — 『東京物語』 (1953)

前述のとおり、2015 年後期の授業では『Sayuri』が鑑賞素材として選ばれたことにより、「外国人が持つ日本のイメージ」と実際の日本とのギャップ、というテーマで考えることができた点は面白い展開であった。だが、2016 年度前期は国際的に評価が高い本物の日本映画を鑑賞させることにした。そこで選択した映画は小津安二郎監督の『東京物語』(1953 年)である。『東京物語』は小津監督の作品の中でも世界的な評価が最も高く、ウッディ・アレンを含む 358 人の監督が選んだベスト 10 作品中第一位に輝いている (BFI, 2012)。物語は、戦後の日本が経験した家族形態の変化と人生の悲哀を描いており、笠智衆や原節子ら名優らの静かな演技が深いと賞されている。映画は「ローアングル・ショット」と呼ばれる撮影方法を含めたシネマトグラフィー (撮影技術) においても評価が高く、小津が家の設えから小物にいたるまで高い美意識とこだわりを持っていた (蓮實, 1992) ことで、映画を通じて留学生に正確だけでなく質の高い日本の美に触れる機会を与える事ができると考えた。著者がアメリカ留学時代、日本映画の名作 (特に小津映画) や小説 (特に三島由紀夫) について意見を聞かれることが多く、その時返答に困ったこともこの映画を選択した理由の一つであった。将来留学を望む日本人学部生にとっても、日本文化や芸術を理解し、英語で意見や感想を伝えることは重要であるからである。学生らには『東京物語』の時代・社会背景に対して理解を深めることができるように、戦後の日本で変化した家族形態について論じた論文 (松原, 1969) を鑑賞前に読むように指示した。

しかしながら、一部の日本人学部生以外、特に留学生にとってはこの玄人好みの映画を鑑賞するのは極めて困難だったことが、鑑賞中の眠そうな様子や感想文の内容から判明した。『Shall we ダンス?』以上に、『東京物語』は日本映画独特の長い「間」が多く、加えてモノクロ映画であったことで、ゲームやアニメに慣れた学生ら (特に留学生) の集中

力を保たせるのは困難であったようである。感想文を書くために、wikipedia を含む映画評サイトに頼る学生も多く見られた。

#### ■ 2016 年後期 — 『ビリギャル』(英語題 Flying colors) (2015)

以前の授業で見た『Sayuri』と『東京物語』は両方とも異なった意味で、著者が期待した教育的効果を果たさない、という結果に終わった。インターネットや時代の影響もあり、若者を中心にメディアの芸術的価値に対する興味や理解は明らかに低下している。この状況に憂いながらも、留学生と学部生が一定の集中力を持って楽しめる作品を選ぶことにした。日本のポップカルチャーに惹かれて日本を選んだ留学生や、映画を観る機会が少なくなっている学部生らに映画の選択権を渡すリスクは避けても、こちらが一方的に「名作だから」と薦める日本映画を彼らが楽しめなければ観る意味を半減させてしまう。SNS 世代の彼らが最も興味があるのは、「自分と自分にかかわる周辺の出来事」のような狭い世界であることが多い。その点を考慮すると、日本の社会を描いていることは大前提でも、古い映画よりも新しい映画であること、彼らが共有してきた体験が描かれていること、が望ましい。そこで選んだ映画は、近年日本国内でヒットした『ビリギャル』(2015 年 土井裕泰監督)である。実話を描いた原作「学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話」(坪田, 2013)をもとに制作され、受験のサクセス・ストーリーを描いている。主人公のビリギャルは、若者の間で人気が高い有村架純が演じており、物語のテンポも良く映画作品としての評価も高い。英語字幕版は海外から購入することとなった。映画を鑑賞する前に、日本の入試制度について説明しておいた。

学生の興味に関しては予想が当たり、2名だけの日本人学部生を含めて留学生のほとんどが映画を楽しめたようで、エンディングでは拍手も起こっていた。留学生も含めて学生らが皆、なんらかのかたちで「高校時代」と「大学入学」を経験していたこと、主人公が同世代であったことで感情移入ができたようである。有村架純が留学生から見ても「かわいい」こと、日本的なイメージと合致する「亭主関白」的な家庭とそれによる家族内での問題が取り上げられていたことも興味を引いたようである。笑うタイミングも学生によりまちまちであることも、お互いが異なる文化を背景に持つことを意識できる点で興味深かったのではないかと思う。多くの留学生らの出身国が欧米(ドイツ、フランス、アメリカ、スウェーデン)であったが、日本よりも熾烈な入試戦争が展開されている他のアジア諸国(中国、台湾)からの留学生も参加していることで、映画鑑賞後のディスカッションでは活発な発言が続いた。欧米からの留学生からは、大半のアジア諸国で実施されている大学入試制度に関して批判的な意見が目立った。ドイツの大学では授業料が基本的に無料であ

ることにアジア人学生らは驚き、アメリカの大学の授業料が過去5年間で高騰していることを知った(次週の授業で参照グラフを紹介した)。欧米の大学では、入学は比較的容易でも卒業するのは非常に困難であり、一部の日本人学生のように授業中に寝ている学生は一人もいないこと、そもそもマナーとして考えられない、など受験制度の問題から授業のマナー、学歴と就職など話題は広がった。このディスカッションが影響してか、感想文の内容は、映画の内容に焦点を当てたものは少なく、映画で描かれていた日本の教育システムや家族関係を自国のものと比較した学生が多かった。



写真1. 2015年前期  
『Shall we ダンス?』(1996)



写真2. 2015年後期  
『Sayuri』(2005)



写真3. 2016年前期『東京物語』(1953)



写真4. 2016年後期  
『Biri-gyaru』(2015)

### 3. 2. 3. Media and politics / Soft power —メディアと政治、ソフト・パワー

2年間の各学期で共通して扱ったテーマは、表現の自由やプロパガンダの話題を含めた Media and politics (メディアと政治) である。この授業は英語で行われるため、欧米からの学生が大多数になることが多いが、英語が流暢なインドネシアからの留学生などアジア諸国からの留学生も参加している。アジア諸国には、社会主義や共産主義的な政治に



より情報統制が行われている国が多い。インターネットの普及により世界から大量の情報を得ること容易になってはいても、社会主義や共産圏の留学生が自国の教育機関で「表現の自由」や「知る権利」、ジャーナリズムについての学ぶことは皆無に等しい。日本は民主主義を理想と掲げる国ではあるが、2011年以降、「報道の自由度ランキング」（国境なき記者団）の順位は下がり続けており、2016年は180か国中72位と発表されている。これは、福島原発事故時の情報統制、特定秘密保護法の制定や高市早苗総務相による放送停止発言などによるもので、国境なき記者団により「多くのメディアが自主規制し、独立性を欠いている」と指摘されている（朝日新聞、2016）。

留学生だけでなく日本人学部生がともに表現の自由や現状について共に考えることはメディア・リテラシーの上で重要である。そこで、まず自国における「報道の自由度ランキング」を予測させたのだが、ほぼ全ての留学生が実際のランキングよりもかなり上位（より報道の自由度が高い）であると信じていたことが判明した。彼らは予想と現実とのギャップから、情報統制というのは国家や機関により巧妙に行われていることを知ることとなったようである。次に、欧米の学生以外にとってはあまり聞きなれないプロパガンダ（世論操作）の話題に入り、第二次世界大戦時代の例も含めて紹介した。プロパガンダについて幼少から学ぶ機会が多いドイツ人学生は知識が非常に豊富であり、ヨーゼフ・ゲッペルズ（ヒトラーの側近で広報大臣）がどのようにヒトラー政権を正当化してドイツ国民を煽ることに成功したか、など他の学生が初めて知る話題を提供してくれた。

2016年からは「ソフト・パワー」の話題を加えた。ソフト・パワーは、ハーバード大学の政治学者であるヨセフ・ナイが1990年に提唱し、彼の著作“Soft Power: The Means to Success in World Politics”（2004）で世界的に注目されるようになった概念である。ハード・パワーと呼ばれる直接的な政治プロパガンダや軍事力と異なる、国が持つ価値観や文化が国際関係や経済・政治に与える影響力（ソフト・パワー）は、インターネット時代には特に欠かせない話題である。実際、増大する日本への留学生の数もこのソフト・パワーによるところが多い。彼らの多くはアニメやゲーム、またはHello Kittyなど「かわいい」日本のカルチャーに惹きつけられているからである。去年は、ピコ太郎（古坂大魔王）によるペンパイナッポーアッポーペン（PPAP）がYoutubeにより世界的に大ブレイク、国内ではTBSドラマの『逃げ恥』（逃げるのは恥だが役に立つ；2016年秋ドラマ）とその「恋ダンス」が話題をさらった。これらも結果的に日本のソフト・パワーとして外交の様々な局面で意外な方法により利用されているのではないか、などと話し合う機会にもなった。

### 3. 2. 4. Group presentation — グループ発表とその他のテーマについて

グループ発表に関して最大の課題は、英語が流暢な多くの留学生と日本人学部生（加えて一部のアジア人留学生）の英語レベルにおいての大きなギャップである。2015 年、2016 年とも前期は「英語が話せるようになりたい」と希望して履修した日本人学生がクラス全体の約半分の人数を占めたが、半数は留学生の早い英語を理解することも意見を述べることも困難な学生であった。それでも、グループ発表では留学生と協力し、実力以上の英語力で発表を終えた彼らの達成感は大きかったようであるが、英語レベルが高い留学生にとっては日本人学生との作業は大変な面もあったようである。グループ発表とその他のテーマについては、ページ数の関係もあり次回の紀要でアンケートと合わせて詳細に報告する。

## 4. 総合評価について

課題①は、「日本の好きな広告」「自国の文化を反映していると感じる広告」を探して規定の用紙に貼り付け、その広告の内容と選択した理由についてグループ内で説明する内容で、総合評価の 10%とした。課題②は、映画鑑賞の感想文（英語）で字数 600 文字以上とし、総合評価の 30%とした。グループ発表における評価は 30%とし、そのうち 40%は各学生が各グループの発表について評価した結果をもとにし、教員（著者）の評価は 60%として合わせた。発表するだけでなく、クラスメイトの発表を聞くことは大切であることを強調するため、評価表に記入した内容（コメント等）も成績の 10%としてカウントした。残りの 20%は授業態度と積極性で評価した。

## 5. 履修学生の構成と授業への影響について

当初、履修学生の数を留学生 10 名、学部生（大半が日本人）は 5 名ほどと予測していたが、前期と後期では学部生の数が大きく異なることが判明した。予想よりも履修した学部生は多く、2015 年度前期は 9 名（表 2-1）、2016 年度前期は 17 名（表 2-3）と倍増した。だが、後期は 2015 年度が 3 名（表 2-2）、2016 年度は 2 名（表 2-4）だけであり、留学生が中心のクラスになった。後期で学部生の数が減る原因は、彼らのほとんどが 1 年生で前期により多くの授業を履修する傾向があるためと考えられる。学部生と留学生における比率の違いで授業内容を大きく変える必要はなかったが、後期のグループ発表では留学生だけの班が大半になること、日本人学生からの発言がさらに少なる点は残念であった。2 年を通じて前期の履修生が比較的多い学部は人文学部と医学部であり、将来留学を希望している学生が多く含まれていた。

留学生の出身国で目立つのはドイツで、これは協定校であるドイツの大学（ハイデルベルク大学やライプチヒ大学等）との交換留学制度が近年活発に利用されていることだけでなく、「アニメやJapan weekなどの大規模イベントを通じて日本文化への人気はドイツの若者の中で高まっている」（ドイツ人学生らによる談）ことによると考えられる。2016年後期には5名の大学院留学生が履修したことで、学術的レベルも社会経験においても差がある学部生と院生が共に参加する授業となった。

表 2-1. 2015 年度前期 履修学生数（総数 20 名）

学部生 9 名		留学生 11 名	
学年別	1 年生 5 名・2 年生 1 名	所属別	国際交流センター 2 名
	3 年生 2 名・4 年生 1 名		人文聴講 9 名
学部別	人文学部 3 名・医学部 3 名		出身国
	生物資源学部 3 名	アメリカ 1 名	

表 2-2. 2015 年度後期 履修学生数（総数 14 名）

学部生 3 名		留学生 11 名	
学年別	1 年生 2 名	所属別	国際交流センター 3 名
	3 年生 1 名		人文聴講 6 名・教育聴講 1 名
			人文研究生/工学部生 各 1 名
学部別	人文学部 1 名・工学部 1 名	出身国	ドイツ/タイ/ベトナム 各 2 名
	生物資源学部 1 名		アメリカ/スウェーデン/マレーシア
			中国 /ロシア 各 1 名

表 2-3. 2016 年度前期 履修学生数（総数 28 名）

学部生 17 名		留学生 11 名	
学年別	1 年生 16 名	所属別	国際交流センター 5 名
	4 年生 1 名		人文聴講 5 名
学部別	人文学部 7 名・医学部 5 名		出身国
	教育学部 2 名	ドイツ 6 名・タイ 2 名	
	工学部 3 名	インドネシア/アメリカ/韓国 各 1 名	

表 2-4. 2016 年度後期 履修学生数 (総数 19 名)

学部生 2 名		留学生 17 名	
学年別	1 年生 2 名	所属別	国際交流センター 4 名
			人文聴講 7 名・教育 1 名
学部別	人文学部 1 名	出身国	院生 (人文・生資・工・教育) 5 名
	工学部 1 名		ドイツ 6 名・台湾 4 名・中国 2 名
			スウェーデン/アメリカ/フィジー フランス 各 1 名

## 6. 今後の課題とまとめ

本稿は、2015 年度より開講している英語のよる授業「Media and Japan」の概要と一部の実践内容、結果を報告しながら、授業における試行錯誤の過程と今後の課題について検討する場とした。この授業の第一の利点は、「留学生と学部生がともに学ぶ機会」を与えることなのだが、この利点は学部生が多く履修する前期のみに限り、後期では圧倒的に多数の留学生が中心となる点では残念であった。日本人学部生と交流を望む留学生のためだけでなく、学部生の実践的な英語能力を高めるためにも、英語による授業を履修することに消極的な彼らの履修数を増やす工夫を考えたい。

その一方で、数は少なくとも「語学能力を向上させたい」、「留学生と交流したい」と希望する日本人学生にとっては、満足度や充足感の高い授業となったようである。留学生からの積極的な発言やその発言内容にも刺激され、不完全な英語でも勇気を持って発言する日本人学部生も多くいた。ただし、留学生と日本人学生の英会話レベルは格段に差があり、そのことで日本人学生とのコミュニケーションに難しさを感じる留学生も多かったようである。この問題に関しては、今後グループ発表と学期後のアンケート調査の資料を用いて詳細に検討する予定をしている。

この授業を率いる意味で最も大きな課題は履修学生の中に様々な次元で生まれた「多様性」(diversity)であった。英語能力における留学生と学部生のギャップに加えて、異文化を背景に持つ学生の集まりであること、学術的、社会経験的レベルに差がある学部生と院生が共に学ぶことで生まれる多様性である。文化的多様性は学生らがお互いの文化を学ぶ上で必要であるが、語学や学術的知識における多様性は難しい課題であった。どのようなテーマをどこまで掘り下げて議論するか、映画鑑賞のためにどのような映画を選択すべきなのか。彼らに適した公約数的な授業内容と実施方法を検討するのは簡単ではない。

その上、「メディア」は話題が広範囲で常に刷新されていく内容であること、文化差や

政治的配慮も必要なこと等から、教える側にとって非常に難しいテーマであると実感している。その一方で、世界中の多くの人々に注目され、国内だけでなく国家間の関係においても多大な影響力を持つ「メディア」や「報道」はこの時代に不可欠な話題である。2015年度後期には、履修学生とともに名古屋のテレビ局を訪問し「報道する」ことの意味や熱意、地域に根ざす番組制作が持つ意義などについて局の方々の協力のもと楽しみながら学ぶ機会も設けることができた。

今後は、様々な上記の課題を解決する策を探りながら、この英語による "Media and Japan" という授業が、どのように個々の学生の日本理解や国際教育、メディア・リテラシーの向上に貢献でき、留学生と日本人学生とが活発に意見を交換する場を提供することができるか、について引き続き検討していきたい。その目的のためには、まず日本人学生の英語によるコミュニケーション能力を向上させることが不可欠である。



写真 5. 2015 年前期 クラス内にて



写真 6. 2015 年後期 東海テレビ訪問の様子

#### 〈参考文献〉

朝日新聞デジタル (2014) 「報道の自由」日本後退 国際 NGO ランク 72 位「多くのメディア、自主規制」<http://digital.asahi.com/articles/DA3S12319871.html> (2016 年 12 月 22 日アクセス)

外務省 (2015) 「日本、そして世界の平和と安全と繁栄のために」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101499.pdf> (2016 年 12 月 22 日アクセス)

栗田聡子 (2016) 「メディアと日本文化」の授業実践による利点と課題『三重大学国際交流センター紀要』第 18 (11) 号 pp.145-166.

Golden, Arthur (1997). *Memoirs of a Geisha*. Vintage: New York

蓮實重彦 (1992) 『監督 小津安二郎』筑摩書房.

Matsubara, Haruo. (1969) The family and Japanese society after World War II. *The Developing Economies*, 7, 499-526.

文部科学省 他 (2008) 「留学生 30 万人計画」骨子

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/07/08080109.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm) (2016 年 12 月 22 日アクセス)

Nye, Jr. Joseph S. (2004). *Soft Power: The Means to Success in World Politics*. Public Affairs: New York

W. Said, Edward (1978). *Orientalism* (Hardcover ed.). Pantheon Books.

坪田信貴 (2013) 『学年ビリのギャルが 1 年で偏差値を 40 上げて慶應大学に現役合格した話』

KADOKAWA/アスキー・メディアワークス.